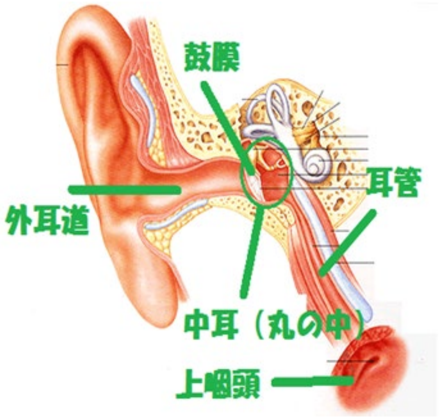
コラム⑥　子供の２大中耳炎、「急性中耳炎」と「滲出性中耳炎」～２つは全くの「別物」！！違いをできるだけ、分かりやすく…

今回は、子供さんがかかりやすい２大中耳炎、「急性中耳炎（きゅうせいちゅうじえん」と「滲出性中耳炎（しんしゅつせいちゅうじえん）」に的をしぼって、お話ししますね。



その前に、まず少しだけ、耳の構造について説明します。

耳の断面図を見てみますと、耳の穴（外耳道：がいじどう）を入っていくと、その奥に鼓膜（こまく）があります。
鼓膜の奥には、頭の骨の一部である「側頭骨（そくとうこつ）」に形成された空洞があります。

ここが、おなじみの「中耳（ちゅうじ）」と呼ばれる空間になります。ここには「空気」がたまっています。

それでは突然、クイズです。
いったい、中耳にたまっている空気はどこから入ってくるのでしょうか？

耳の穴からですか？…うーん、違います。
耳の穴の奥には「鼓膜」があり、中耳はその奥側ですので、ここからはムリですね。

中耳には空気の出入口があり、「耳管（じかん）」と呼ばれる管によって、上咽頭（じょういんとう）とつながっています。この上咽頭とは、「鼻の一番奥にある壁＝のどの一番上の部分」です。

耳管は鼻の奥と中耳をつなぐ、「耳の奥に空気を送る管」なのです。

…何となく、わかっていただけましたでしょうか。
難しければ、ここまでは読み飛ばしていただいても大丈夫ですよ。

1、急性中耳炎（きゅうせいちゅうじえん）

上咽頭から耳管を通って細菌やウイルスが中耳に侵入し、鼓膜や中耳に炎症を起こしたものが、おなじみ「急性中耳炎」です。

上咽頭は風邪のときに細菌やウイルスが繁殖するところであり、つまり、「風邪をひいたときに急性中耳炎を合併しやすい」のです。

子供さんが多いですが、時々、大人もなることがあります。

症状は「耳の痛み」のほかに、症状により「発熱」、「耳だれ」を生じることもあります。

「耳だれ」は、中耳で細菌が繁殖し、「膿」がたまることが原因です。
中耳で膿がたまり、その逃げ道がない状態の時には、「激しい耳の痛み」や「発熱」が生じます。

しばらくすると鼓膜の一部に自然に小さな穴ができ、たまっていた膿が耳の入り口に出てくることがあります。
これが「耳だれ」なのです。

耳だれが生じると、耳の痛みや発熱はすみやかに改善します。

治療は抗生剤の内服、点耳（液剤を耳に入れる）、また痛みや発熱には解熱鎮痛剤を用います。

最近は抗生剤の進歩により頻度が減りましたが、症状が重い場合、まれに人工的に鼓膜に小さな穴をあけて排膿を行う、「鼓膜切開（こまくせっかい）」という処置も行うこともあります。

自然にあいた穴にせよ、人工的にあけた穴にせよ、中耳炎の改善後にはごく一部の例を除いて、鼓膜の穴は自然に閉じます。
ご安心くださいね。

高熱や激しい耳の痛みを伴う重症例には、この鼓膜切開を行えば、すみやかに症状は改善します。

最近は鼓膜切開を敬遠する風潮がありますが、子供さんにとって、一番早く中耳炎の痛みの症状をやわらげる手法であり、私は症状により、適切に用いるべきと思います。

ところが最近は、「急性中耳炎」自体、かなり減少傾向なのです。

昔は耳鼻いんこう科の「看板」疾患であったあの中耳炎が、どうしてかって？

理由は…「予防接種」です。

近年定期接種として行われるようになった、小児の「Hib（ヒブ＝インフルエンザ菌ｂ型）ワクチン」、および「肺炎球菌ワクチン」が影響しています。

本来は、子供が命を失ったり、後遺症が残りやすい細菌性髄膜炎などの予防目的のワクチンですが…

実は…子供の急性中耳炎の３大起炎菌（原因となる菌）のうちの２つが、「インフルエンザ菌」および「肺炎球菌」なのです。

これらワクチン接種の定期化が、急性中耳炎の予防にもなっているのですね！

2、滲出性中耳炎（しんしゅつせいちゅうじえん）

はじめに申しあげておきますが、この項目はしっかり説明させていただかなくてはなりません。

前にも言いましたが、この病気について、間違って解釈している親御さん（場合によっては医療従事者も）が、非常に多いと感じているからです。

冒頭の耳の図をもう一度ご覧ください。今回は、「耳管」がクローズアップされます。

何の働きをするところだったでしょうか…そうです。「鼻の奥から中耳に空気を送り、換気をしている」管でしたね。

この耳管なのですが、子供さんは発達が未熟であり、中耳の換気の働きが不十分になることがあります。

そして、慢性的に中耳の空気が不足してきます。

すると中耳を取り囲む粘膜から滲出液が出てきて、不足する空気のかわりに中耳にたまりはじめるのです。

不思議ですよね。

本来空気が入っているべき中耳が、この滲出液で満たされてしまった場合が「滲出性中耳炎（しんしゅつせいちゅうじえん）」と呼ばれる状態なのです。

ですので、滲出性中耳炎の状態は、細菌やウイルスが中耳に感染しておこる「急性中耳炎」とは全く別の状態であり、中耳内にたまった滲出液を調べても、通常細菌は出てきません。

ね、急性中耳炎とごちゃ混ぜにしてしまうと、トンデモナイ！ですよね。

またわれわれ耳鼻いんこう科医は、この状態を、「鼓膜の奥に水がたまった中耳炎」と説明することが多いのですが、実際は水が外から入り込んだわけではなく、「滲出液＝体液」が中耳にたまってしまうのです。

大人がこの中耳炎になると、「耳がこもった感じ（耳閉感）」や「聞こえにくい感じ」の症状が気になりますが、子供は訴えないことの方がほとんどです。

子供は耳閉感の説明がうまくできず、「耳がいたい」と言ってしまうことがあり、急性中耳炎の症状とまぎらわしいことも、時々あります。

そして両耳とも中耳に滲出液がたまってしまうと、周囲の人が子供の難聴（よびかけ

に反応しない、聞き返しが多くなった、あるいはテレビの音が大きくなった…など）

に気づき、受診されるケースもあります。

ここまで、お疲れ様でした。
滲出性中耳炎の治療については、長く、長ーくなりますので、次回お話しますね。

今回はここまで。

次回は、「滲出性中耳炎の治療について」です。

さまざまな滲出性中耳炎の治療法について、お話ししますね。